

知的障害児を対象とする 4 つの話題提供を受けて、鷲尾純一氏から、「障害種別の言語発達の特異性」「教育支援につながる評価」という主に二点について各話題提供者に対してコメントがなされた。また、新生児期聴覚アセスメントなど、氏の研究や最近の聴覚障害の言語評価に関する知見を紹介された。また、フロアから、具体的な教育支援への適用とその方法について質問や意見が出された。(橋本創一・林 安紀子)

自主シンポジウム 15

生活の文脈を生かした

コミュニケーションの指導

—スクリプトを利用した指導を取り巻く現状—

企画者 佐竹 真次 (山形県立保健医療大学)
長崎 勤 (筑波大学心身障害学系)

司会者 長澤 正樹 (新潟大学教育人間科学部)

話題提供者 長崎 勤 (筑波大学心身障害学系)
関戸 英紀 (横浜国立大学教育人間科学部)
佐竹 真次 (山形県立保健医療大学)

指定討論者 宮崎 眞 (東京都立町田養護学校)

1. はじめに

生活の文脈を生かしたコミュニケーションの指導法として、スクリプトを利用した指導法が広がっている。スクリプトは現実生活の中核的場面を写し取るものであるために、コミュニケーションを自然なかたちでサポートすることが容易であると考えられる。基礎研究では各種スクリプトの開発と共同行為ルーティンの心の理論獲得へのサポート効果検証などが行われてきた。また、学校教育との関係における応用研究も着実に発展してきている。本シンポジウムでは、その後展開のみられた心の理解との関係、学校教育における進展、スクリプトの家庭生活・地域生活への寄与などを中心に、スクリプトを取り巻く現状を各話題提供者が報告し、討論を展開した。

2. 話題提供

関戸英紀：「自閉症児に対する共同行為ルーティンを用いたあいさつ語の指導」

「いただきます」「たがいま」「ありがとう」(以下、あいさつ語とする)の自発的表出に困難を示す、CA 13 歳 0 か月、MA 3 歳 9 か月の自閉症男児に対し

て、「買い物」ルーティンを用いて、あいさつ語の自発的表出を目的とした指導を約 3 か月間 (31 セッション) 行った。その結果、あいさつ語の自発的表出が可能となり、またある程度の日常場面での般化および指導終了 5 か月後の維持が確認された。以上のことから、対象児にとって、“出かける”“帰宅する”“物をもろう”という 3 つの場面の文脈の理解が可能になったこと、あいさつ語の習得には聴覚的プロンプトの提示よりも視覚的プロンプトの提示のほうが有効であったこと、文脈の理解と言語の表出との間に相互に関連する傾向がみられたこと等を述べた。

佐竹真次：「生活に根ざしたスクリプトの選択」

広汎性発達障害の幼児を対象とし、家庭生活と保育園生活の中のスクリプト的成分を調べた。それらのスクリプト的成分をもとに、就学前の発達障害児の家庭生活と保育園生活の中で必要とされる数種のコミュニケーション・スキルを同定し、その獲得をサポートする種々のスクリプトの再構成と実施を試みた。コミュニケーション・スキルとスクリプトの選定は、子ども自身の興味・関心と発達水準、両親から見た必要性と緊急性等に基づいた。その結果、おやつスクリプト、カップケーキ作りスクリプト、買物スクリプト、貼り絵スクリプト、遊びにまざるスクリプト、教示要求スクリプトなどが抽出された。実施の結果、スクリプトに組み込まれていた挨拶、行為要求、物の要求、援助要求、教示要求、叙述、謝辞などの言語行動が改善・習得され、家庭・保育園におけるコミュニケーションと適応行動について顕著な改善がみられた。このことから汎用性の高いスクリプトのバッテリーを組み立てることを目指していくことの重要性について指摘した。

長崎 勤：「スクリプト指導の新たな可能性—柔らかな『心の理解』を援助する」

すでに、多くの研究で明らかにされているように、スクリプトを用いた指導は多くの効果を示してきた。その理由としては、大きく分けて 2 点があるであろう。1 つは、スクリプト理論が言語獲得のメカニズムに添ったものであり、スクリプトを通して子どもは「無理なく」コミュニケーション・言語の世界に入ってゆけるということである。2 点目は、子どもの日常生活文脈を有効に利用するために、社会参加 (participation) という概念にもフィットしやすかったという点であろう。つまり、プログラムの心理学的・理論的背景としても、障害児者の教育・福祉理念としても妥当性が高いといえ、今後ますます、展開が予想される。

第38回大会シンポジウム報告

しかし、ときに誤解も生じているようである。多くの誤解は示されたスクリプトのような“せりふ”が言えればよいのだ、という誤解である。「パターン」的な言語使用なのだ、と。それらの誤解をしている方に、私たちが実際に指導している場面やビデオを見ていただくと、多くの誤解は解ける。感想は「ああ、楽しそうにしているんですね」「自然な感じがします」等である。日常のスクリプトの中には「豊かな情動」や「心の理解」が含まれており、スクリプト指導は単に、語彙・文法、伝達機能の指導だけでなく、「情動」や「心の理解」にこそ本領を発揮するものと考えている。すなわち、スクリプトという文脈設定の中では、非定型な場面に比べ、「他者の心の読みとり」はより容易になるのである。以上の考えとともに、他者の選択行動(意図)を尊重する行動の実際の指導例を紹介した。

3. 指定討論

(1) 指定討論

宮崎 眞：長年にわたる特殊学級、養護学校での指導経験をふまえながら以下の4点を質問した。

① 文脈を活用したコミュニケーション・ことばの指導は、実態を把握し、具体的な個別の指導目標を設定する技術と方法が求められる。これには発達のアセスメントと社会的なアセスメント(社会的妥当性)があると思う。アセスメントから具体的な標的行動の決定までの考え方と手順を紹介してほしい。

② 就学前、小学部、中学部、高等部では、文脈やスクリプト自体が異なるように思う。生活年齢との関係で、スクリプトの選び方、作り方の配慮事項を教えてください。

③ 自分の実践では、要求、報告、応答の機能は、計画的にルーティンを活用して子どもに成果を上げることができた。しかし、友だちの遊びに対するコメントなど叙述機能のことばを計画的に産出した指導実践を持っていない。計画的に言語機能の種類を増加させるという点で、考えを聞きたい。

④ 文脈を活用し、スクリプト・ルーティンを活用した指導方法は、研究レベルでは非常に効果を上げ、指導方法として確立していると思う。この指導方法は、学校にもっと導入される必要がある。現場への普及に関して、考えていることがあったら教えてください。

(2) 指定討論への回答

① について、関戸は発達の妥当性、MA、社会的妥当性、親の願いなどを考慮することが重要だと述べた。佐竹は社会的妥当性に関して、指導した行動が現

実に用いられる場面と人を想定することが必要であること、長崎は親の願いについて、気持ちの共有に重点を置くことが重要であることを補足した。

② について、関戸はスクリプトの精緻化、CAに応じたターゲット選択が必要と述べた。同様に佐竹は、作業などの年齢相応のスクリプト選択、相応しい言語形式の選択の必要性について補足した。

③ について、関戸は「神経衰弱ゲーム」の実践例から、「勝って嬉しい」「負けて悔しい」という体験が得られてはじめて「嬉しいね」「楽しいね」といった叙述が可能になると述べた。佐竹も、活動自体を楽しめることと人を好きになることが叙述を成立させやすくすることを述べた。

④ について、関戸は現職の先生方とともに行うワークショップとロールプレイで実感と体験を得ていただくことを提案した。佐竹は、スクリプトのネット配信の可能性について述べた。長崎は、教師へ援助のポイントを教え、チェックリストで記録すること(指導者の援助の仕方を評価していることになる)を支援することが重要であると述べた。

(3) フロアからの質問・意見

フロアからは、「情動の理解が最も難しい。他者の心情の理解にかかわるスクリプトはあるのか?」(愛媛大・花熊氏)という質問があった。これに対して、長崎が「相手の欲求理解が情動理解の原初的なものであり、身体を感じ方の巻き込みや巻き込まれ体験が大切である」と述べた。また「挨拶などの社会的ルール・習慣の獲得は重要なことである。しかし、本人自身の切実さがどの程度であるかを推測することは難しい」(山口大・松田氏)というコメントがあった。

4. まとめ

このシンポジウムでは、本アプローチの有効性・応用性の高さが示され、さらに以下のような課題が明らかになった。a) アセスメントと標的行動とスクリプト、および指導手続きの関連性を整理していくこと、b) 情動を喚起したり理解したりするのに有効で叙述機能を促進するようなスクリプトの開発、c) 本アプローチを活用しやすいようにしていく条件(援助の方法・記録の取り方・まとめ方等に関するワークショップ、スクリプトやチェックリストの供給など)の検討。
(長澤正樹)